アマチュア劇団「劇団文芸座」（富山市）と可西舞踊研究所（高岡市）は今月５日から14日にかけて南米チリ領イースター島を訪れ、舞踊と演劇公演を成功させた。いまだ多くの謎に包まれたモアイ像が点在する「神秘の島」で、派遣団は島民たちと文化を通じて交流し、感動を分かち合った。帰国後、メンバーは「島で得たものを基に、新たな作品を作りたい」と成果を強調した。（田辺泉季）

文芸座・可西舞踊研
イースター島で公演

鳴りやまぬ拍手 胸熱く

モアイ像の前で踊る可西舞踊研のメンバー6人＝8日、イースター島

派遣団の10人は5日に羽田を出発し、米ロサンゼルス、チリ・サンティアゴを経て、7日にイースター島に降り立った。

大きな目的は二つ。一つは、可西舞踊研がモアイ像の意味や印象をモチーフに作ったパフォーマンス「モアイ～今を感じ、今を踊る」を像のそばで上演することだった。

モアイ像の前で

島には世界遺産「ラパ・ヌイ国立公園」があり、約900体のモアイ像が現存する。観光客による破損や落書きを防ぐため、周辺は島当局が立ち入りを制限しており、上演予定日の直前まで実現できるか分からなかったという。

ただ派遣団は島の舞台芸術祭に招待されており8日朝、立ち入り許可が下りた。可西舞踊研助教授の片岸香里は「島に来た第一の目的が果たせると思うと、どんどん気持ちが高まっていった」と振り返る。

舞台は海沿いのタハイに決まった。同助教授の横田ほの華は「像の前に立った時、海と空の青さ、緑の豊かさ、そして像の迫力が一つになって目に飛び込んできた。あの感動は忘れられない」と言う。

「モアイ」は現地の言葉で「未来に生きる」という意味。可西舞踊研の6人は「祈り」「愛」など像にちなんだメッセージを込めた作品を披露した。同舞踊研助教授で派遣団副団長の松下美規は「像にはさまざまな意味があり、島民たちに今を生きるエネルギーを与えていると知った。富山から送り出してくれた皆さんの支えがあって実現したことに、改めて感謝の思いが込み上げてきた」

岩肌に生えた草原を吹き抜ける風、打ち寄せる波の音も作品の一部となり、日の光が天然のスポットライトとなって出演者を照らした。桂井優依は「波音、風、太陽の全てが心地よくて、自分自身が浄化されていくように感じ、涙が止まらなかった」。同舞踊研出身で現代舞踊家の川幡磨美は「自然の豪快さと島の温厚な生活。この地で感じ取った多くを今後につなげていきたい」と話した。

㊤舞台芸術祭で派遣団の公演を楽しむ観客たち
㊦劇団文芸座が上演した「結婚の申し込み」
＝いずれも9日

団員「一生忘れない」

立ち見含め800人

もう一つの目的は、8、9の両日に島内の体育館で開催される「ラパ・ヌイ舞台芸術祭」に参加することだった。

8日夜は島民がそれぞれの部族に伝わる舞踊を披露し、派遣団を歓迎した。民族衣装をまとい、体にタトゥーのような文様を入れた島民たちの踊りと歌に、川幡は「その土地に長年根付いている民謡や舞踊を踊る島の人たちの力強さに感銘を受けた」。

9日は派遣団がステージに立った。「日本からのゲスト」が出演するとあって、来場者は400席の座席に収まらず、立ち見を含め800人ほどが詰めかけた。

文芸座は、ロシアの劇作家・チェーホフの喜劇を日本風に翻案した「結婚の申し込み」を上演した。日本の田舎が舞台で、秋田弁で演じるため、あらすじをスペイン語で解説したチラシを観客に配布した。ひょうぶや床の間をしつらえ、日本らしさを強調。出演者の軽妙な演技に観客から笑いが湧き起こった。文芸座代表で派遣団長の舟本幸人は「『どんな会場も舞台になる』が文芸座のモットー。体育館の仮設の舞台だったが、お客さんの呼吸がよく伝わってきた」と述べた。

島民が部族に伝わる伝統的な踊りを披露した＝8日

可西舞踊研は富山の民謡などを取り入れた「日本の響き」を披露した。日下萌は「幕が開いた時の反応や、盛り上がっていく歓声、踊り終わった後の鳴りやまない拍手に胸が熱くなった。一生忘れられない」。

終演後、紋付きはかまなどの衣装をまとった出演者たちは観客に囲まれ、写真撮影をせがまれた。島の飲食店や売店に立ち寄ると、島民たちが「店を早めに閉めて舞台を見に行ったよ」「素晴らしかった。お土産を持っていきなさい」と声をかけてくれたという。

チリ本土に戻った一行は12日、サンティアゴでも公演。14日に帰国した。舟本は「イースター島で公演するという念願を実現でき、文芸座としての新たな足跡を残せた」と充実感をにじませた。松下は「舞台の環境が日本とは全く違う中、派遣団のメンバーで考えを巡らせながら公演を成功に導くことができ、出演した皆の成長につながった」と話した。

イースター島の正式名称はパスクア島で、現地ではラパ・ヌイ島と呼ばれる。南半球にあるため日本とは季節が逆で、派遣団が訪れた時は冬だった。ただ団員によると、日中は20度くらいあった。

島は「南国の田舎の風情」だったという。空港から宿泊施設へと向かう道沿いには平屋の家々やヤシの木が立ち並び、幹線道路を外れれば、足元は砂利や泥交じりの道に変わる。野犬のほか鶏や馬、牛が放し飼いにされており、馬は島民の移動手段としても活用されていた。

島に数多く残されているモアイ像。現地ガイドによると、像が海に背を向けて立っているのは荒波から島民たちを守るためなのだという。可西舞踊研助教授の松下美規は「モアイの大きさ、草原の広さなど、かつてないほどに地球のエネルギーを感じながら踊ることができた」と話した。

モアイの島の印象
「地球の力 感じた」

上の生 子

亡き母の最後の春巻き

せながら、熱いからか懐かしいからか顔をゆがめて食べる兄―。火を通したものを私にも分けて

演

「80（歳）の壁は厚い。絶対、もたないと思っていた」。吉本新喜劇の重鎮で、7月で80歳になった池乃めだか＝写真＝

すぐに乗れる中古車が常時300台以上!
県内20の店舗ネットワーク!
新車販売店舗からでもお選びいただけます。